

Title	J・D・B・ミラー著『政治の本質』 B・クリック著『政治の養護のために』
Sub Title	J.D.B. Miller : The nature of politics B. Crick : In defence of politics
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.2 (1963. 2) ,p.92- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19630215-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

J. D. B. Miller:

The Nature of Politics

London, Gerald Duckworth & Co. Ltd.,

1962, ix+296 pp.

Bernard Crick:

In Defence of Politics

London, Weidenfeld and Nicolson, 1962,

156 pp.

J. D. B. ミラー著

『政治の本質』

B・クリック著

『政治の擁護のために』

これらの二著書はいずれも、政治というものについての固有の見解というより、典型的な見解を、しかも互いに似かよった基礎的原理に立つた見解をあらわしている。政治とはなにか、という問題に

対する著者たちの規定をみよう。ミラーはこう述べている。「政治行動 (political activity) は……不一致から生ずる。そしてそれは、変化の方向あるいは変化の阻止に向つて葛藤を解決すべく、政府を使用することにかかわるものである。政治を明確に認識し得る行動として特徴づければ、それは、政党あるいは人間のあいだに、あらかじめなんらかの不一致があること、そしてその不一致のある方向へと解決してゆく手段として政府が存在することを必要とする。」クリックによれば、「政治は、共通のルールのもとの一定の領土的単位内における、異つた集団、したがつて異つた利益と異つた伝統との同時的存在の事実を承認することから生ずる。」「それゆえ、政治とは、相異なる利益に対して、全体社会の福祉と存続のために、それぞれの重要性に応じて権力に参加させることによつて、一定のルールの単位内でそれらの利益を宥和させる行動 (activity) として、端的に規定され得る。」このように、ミラーおよびクリックは、政治のブルバリズムの立場を明示し、政治のもつとも政治的な思考方法を展開している。そして、『政治の本質』がいわば『政治をいかに考えるか』を主張するものであるとすれば、『政治を擁護するために』は、逆にいつて『政治をいかに考えてはならないか』を主張しているといつたらよいであらう。

政治状況というものが社会構成の多様性を前提とし、かつその自然的反映であるとすれば、この多様性あるいは不一致の具体的形態である『利益』が、政治体制内部でアクティヴに作用するインタレスト・ポリティックスを考察することが、政治の理解にとつても

つとも重要な課題である。言うまでもなく、発展した社会であればある程、利益の分化が複雑となり、特殊化する傾向にある、そしてそこでは、政治的な意味での利益は、当然、組織化された利益集団というかたちをとる。近代的国家における政府は、これらの諸集団間の対立を規則的手段を媒介として調整する機能を制度化したものであり、したがって、特殊の利益の適切な配分に対する一般の配慮に、その正当な根拠をもっている。このような政治、もしくは政府は、議会主義的制度をそなえた諸国家について言えることであつて、そうではない場合、たとえば一党制とか専制の政治は、本質的には、非政治的なのである。この点は、後程クリックの論議を参照することにしたいが、ともかく、政治過程の「ノーマン」を対立関係にある利益の調整として捉え、一般の利益の自律的表示化として考えないかぎり、ミラーにかぎらず、「政治の擁護」者に共通した判断であらう。

ところで、一般的利益とはなんであるか。神とか自然の意志、プラトンの有機体の比喩、あるいはマルクス主義、人種理論、ナショナリズムのさまざまな歴史解釈、これらの立場からする一般の利益とはきわめて特殊的で、じつは特殊の集団の特殊の利益の一般化にほかならない。それに対してインタレスト・ポリティックスは、本来それが特殊の利益の特殊化を有効に発展せしめるものである以上、ア・ブリー的な立場から一般の利益を指定し得ない。むしろそこには、共同生活の必要性から、危機に対する防衛、法と秩序の維持、安定した通貨、あるいは教育制度といった共通の利益は存在す

る。しかしながら、それらはいわゆる多数による利益 (majority interest) であつて、同意以外のなにものでもない。さらに、政策形成に関連して、一般の利益の名のもとにおこなわれる政府の決定は、つねにある特殊の利益であつて、しかもそれが一般の利益としてすべてに同意されるためには、まず政治体制の基礎的枠組にコンフリクトがないこと、つまり《コンセンサス》があつてはじめて可能となる。この政治的コンセンサスがなければ、インタレスト・ポリティックスは、インタレスト・ポリティックスとして破産せざるを得ない。だが、議会制のもとの政治は、まさにインタレスト・ポリティックスであるがゆえに、他のいかなる政治にもまして政治的でもあるわけである。

ミラーの基本的考え方はけつして獨創性に富んだものではない。かれは、利益を操作する個人、利益がそのなかで作用する制度、利益の表現としての、またはその合理化としての政治思想を論じ、ついで、反覆的にあらわれる政治状況として専制的、寡頭制的、一党制的、議会制的体制と、その各々における政治的緊張関係の諸側面を考察し、さらに現在の政治体制を制度的基準ではなく、現実的作用を基準として分類化 (確立された議會制、実験的議會制、軍事的・恣意的専制、準教權制、植民地制、共產制) している。そのほかに、労働組合、教会、企業、会社重役会などのいわゆる private politics についても言及がなされている。それらと主權的国家的政治との差異は、後者のトータルな影響力にあるとされるのも当然のことである。概して、ミラーの記述は平明であるけれども、いささか冗長で

あつて読み疲れる。最後に、政治研究の問題に關してのかれの考えの大筋がしるされてあるが、ここでもさして目新しい知識を見出すことができないまま、われわれは、つぎの一節を引用して、より挑戰的な「政治の擁護」論への橋渡しをしたい。

「わたくしは、政治研究には非常な困難があること、しかし研究者が秘蹟を期待せず、また秘蹟をおこない得るなどと主張するような異にかからないかぎり、これらの困難にぶつかつてゆく成功の希望があることを示そうと努めてきた。政治は生活の全体をなすのではなく、また多数の人びとが政治思想などなくとも永年くらししてゆけることも真実である。だが、政治が爆裂すると、そうなることがしばしばなのだが、政治は共同体のあらゆる生活に影響をおよぼすこととなる。たとえ爆裂しなくとも、政治が平常の作用で進行しつつある場合でも、政治は多様な方法で社会生活に影響をおよぼすものである。だからわれわれは、政治というものの重要性を正当に主張できるのである。さらにわれわれは、人間生活の魅惑が政治に繰りひろげられると主張できる。人間をして政治行動に駆り立てる動機、かれらの行動がとる形態とかは、人間の基本的情念と密接に結びついているので、人間はそれら情念とともに、人間的苦しみのですべての悲喜劇をもち運ぶのである。」

政治とはあまりに人間的な行動である。にもかかわらず、政治がなにか非人間的な、人間自身の自己喪失として物悲しげに呪われていることこそ、現代の厭しい負い目である。クリックの書は、政治の敵たちに対して、偉大な、そして文明化(civilized)をめざす人間

的行動としての政治のちからに、自信を恢復させることを目的としたものである。人間は人間の条件によつて生活する、政治を通じて絶対的なものを把握することはできない、というのがクリックの一貫した信念である。politics is politics とは、もちろん言葉の単なるトリトリロリーではなく、政治を必要悪としてではなく、また政治を超え出たなにかとしてでもなく、まさにリアリティックな善として思考する態度を意味する。このような政治的思考に對立して、さしずめ槍玉にあげられるのは政治のイデオロギー的思考である。今世紀のデモクラシーの時代において、このイデオロギー的思考と、それに依存した全体主義的支配を代表的に示すものはナチズムとマルクス主義であらう。それらの運動があらゆる社会關係を《政治化》しようとする試みは、政治を排除しようとする反政治的なものである。全体主義的イデオロギーというものは、社会の多元的構造と個人の精神的獨立性を破壊し、大衆的支持を土台としながら、ひとつの理想に不斷に志向してゆくからである。他方デモクラシーについても、その誰かまわずに情婦となる嬌逸さに、たとえかの女の独り占めの貞節を要求できなくとも、せめてその曖昧さの嫌疑を晴らすだけの弁護を必要としよう。しかし、デモクラシーとても所詮は政治の一形式である。われわれは、ある状況でのその程度の差を論ずることは可能であつても、どのような国家の發展段階にも望ましいと言うことはできないのである。

ナショナルリズムの政治は、デモクラシー的ナショナルリズムあるいは《人民主權》の主張に、帝國主義あるいは外国支配に対する反対

に、その正当性が認められる。また、すでに確立された国家のナショナリズムにも、危機の時代には作りつけの (imagined) 弁明があったえられるように思われる。けれどもそれらは、冷静な懐疑主義をもつて薄められ、全体主義的デモクラシーの沸騰点から政治的寛容の体温にまで下げられる必要がある。実際、ナショナリズムというものに客観的基準があるわけではなく、民族性とは民族を形成しようとする決断によつて形成されるだけなのである。しかもナショナリズムが人種理論のような神話に穢されたたり、あるいは新興国の場合のようにかえつてその民族的統一が多様性を弾圧するにいたつては、ナショナリズムも政治とは言えず、そのイデオロギー性をむき出しにしてしまう。

政治において確実性をもたらそうとする欲求は、先に述べたイデオロギー的思考ばかりでなく、むしろそれと密接に関連した部分をもつ思考様式、しかも顕著に現代的な傾向であるテクノロジイ的思考にもみられる。政治をテクノロジイあるいは科学、行政技術にのみ還元可能だとするヴィジヨンは、科学的・専門的知識の社会的適用と人間社会の再構成という観点から、安易に政治無用論を生みだすが、それはけつして稔り多いものではない。今日の全体主義的イデオロギーは、科学——科学的方法もしくは法則——をもつて唯一の行動原理とし、エセ科学の熱狂のパラノイアに陥っている。だがそればかりではなく、自由社会における政治の学問的研究にも《科学主義》の危険はますます拡大しつつある。このような挑発的傾向は、アメリカの社会科学者の偏見のうちにもつとも強くあらわれて

いるが、その科学的研究も閉ざされた文化的状況に内在する政治的要素の知的操作にはかならず、科学ではなくイデオロギーなのであつて、それを意識し得ずにいる知的傲慢さを捨て去らねばならないであらう。

政治はまた、政治の友たちに対して擁護される必要がある。かれらは非政治的な保守主義者であり、無政治的な自由主義者であり、反政治的な社会主義者である。保守主義者は政治を職業と心得、反教条主義的で経験的・実践的である。かれらは伝統主義者である。たしかに、政治はいわば《過去との対話》であり、ある意味で伝統というものを必要条件としている。しかし、伝統もブルラルであり、しかもなお反伝統の伝統すらあり、保守主義者が特定の伝統を伝統化することは許されないのみか、それが支配階級の伝統を弁明するとあつては言語道断である。E・パークのいう「保守するために改革する」だけではなく、「保守するために創造する」ことこそ、保守主義の在り方であらう。自由主義者と呼ばれる者は、政治にあまりに多くを期待しつつ、事実上政治に深いアンティパシーを抱いている。かれらの強調する個人主義、自然権、平等主義あるいは社会（＝経済的自由主義）は、しばしば政治からはみ出したもので、自由主義者は国家に対しても不信の念をもっている。こうした自由主義の伝統的エリートスは、いまだマルクス主義に譲り渡されている。保守主義者とは反対に、だが非政治的保守主義者といささか相俟て、社会主義者は未来と歴史の希望に耽る傾向にある。かれらは、現実において、政治的リーダーシップの責任の倫理が無いま

まに、究極目的の倫理を追求する。社会主義者の理論的思考は——皮肉にも‘student politics’といわれる——、すべてを原理の問題として取扱ひ、反政治的な行動を導きがちである。

結びに、「政治の讃美のために」から二・三の箇所を引こう。「政治的妥協は、自由のために支払われねばならない犠牲である。われわれは犠牲を払つてゐるといつてみずからを欺かず、それは正常に支払ふ価値があるものと考えよう理性を呼びおこそう。」「政治権力とは仮定法の権力である。政策は科学における仮設のようなものでなければならぬ。政策の擁護者はその真理にコミットするであろうが、かれらはその可能的反証を思いつき、そしてそれを受けいれるような態度においてのみコミットする。政治は、科学と同様に、創意的かつ懐疑的である開いた態度のために讃美されねばならない。」「政治的行動が重要であるのは、それ自体でなす価値がある絶対的な理想とか事物があるからではなく、人間の日常的判断のうちに、これらの多くの事物があるからである。政治的道德性は、理想的行為に対するなんらかの信仰と矛盾することはない。……政治において道徳的に行動することは、自分の行動の諸結果を配慮することである。」「政治をほめそやすには遅しが無い。経済においては遅く、まさに政治において対立の創造的弁証法が見出される。……というのは、政治こそ自由なる文明が依拠している果敢な深慮、多様な統一、武装した和解、自然的作意、創造的妥協であり、真剣な遊戯であるからである。それは改革する保守主義者、懐疑的信仰者、多元論的道德家である。政治は激しい冷静さ、複雑な単純さ、猥雑な高

潔さ、粗野な市民性、そして永遠なる瞬間をそなえている。政治は討論に見合つた争闘であり、そしてわれわれに、人間的尺度であまりに人間的な課題をあたえるのである。」

もとより、この著者は政治に対する熱烈な讃辭だけを述べてゐるわけではない。政治はその栄光とともに、「それが直面する危険にも遅しが無い。だからこそ自由の責任と不確実とを拒否しようとする尤もらしい理由も沢山あるわけである。われわれがなそうと試みたことといへば、なぜ政治行動がガヴァメントの一形態としての単なる権力関係と政治的支配の形式としてみなすのがもつとも妥当であるかを示すことであつた。そしてまた、ガヴァメントの問題に対する政治的解決というものは、通常、他のものに対する選択なのだという理由を示すために議論をすすめたのである。政治の擁護と讃美のためのこのような不完全なエッセイにしめくりをつけるには、これまで叙述してきたことがなんであるかをきつぱり繰り返すほかない。」こうして、クリツクは、アリストテレスの言葉を借りて、本書をおえてゐる。「……ここに目的と言うのは、彼(ソクラテス——筆者)が最高善としてゐるところの(国全体が出来る限り一つであること)というのを指す。……けれども国が一つになることが或る程度以上に進んでいけば、もはや国でさえないということになるのは明らかである。何故なら国はその本性上一種の多数であつて、より以上に一つになれば、国は国たることを止めて家になるだろうし、家は人になるだろうから。……従つて人はたといこのことを為すことが出来るとしても、為すべきではない。それは国を破

壊することになるからである。」(アリストテレス『政治学』山本光雄訳、岩波文庫版、六八一六九頁)

(奈良和重)

法制史学会編

『法制史文献目録』

去る昭和二十四年十一月、「法制史に関する研究及びその研究者相互の協力を促進し併せて外国の学会との連絡を計ることを目的」(『法制史学会規約』第三条)として法制史学会が設立されてより、数えてすでに十余年の歳月を閲した。

かえりみれば、創立総会に参集したわずか三十名にすぎなかつた会員は、年を追つて増加の一途をたどり、いまや二〇〇名をこえようとしている現状である。また、毎年もたれている春期の総会、秋期の研究大会ならびに東京・近畿などにおける部会は盛会裡に開催され、学会機関誌「法制史研究」の刊行も順調にすすめられて、すでに十二号を世におくつた。斯学の進展のため、まことに慶賀のいりである、といえよう。

ところで、数年前、法制史学会においては学会創設十周年を記念

して、二つの事業が企図された。一つは、昭和三十三年十月、京都大学でひらかれた研究大会の共通テーマ「刑罰と国家権力」の研究報告を一卷の論文集にまとめて上梓することであり、他の一つは、学会発足以降、十年間にわたる法制史関係研究文献総目録の編修・印行であつた。前者については、すでに昭和三十五年四月、法制史学会編「刑罰と国家権力」と題された浩漭な專著が発刊され、その充実した内容をもつて学界を裨益していることは周知のとおりである。後者が、すなわちここに拙文を弄して紹介しようとする「法制史文献目録」にほかならない。そもそも法制史学会では、過去十数年来、各年度の法制史文献目録を編集する作業をつづけ、現時までに十三輯を作成してきた。それは謄写印刷あるいはタイプ印刷による目録であつて、春期の総会において委嘱した文献目録委員の手に成る。この年刊の文献目録は、もちろんそれ自体として便益の多い、価値たかきものであるが、数年分をまとめ単行本として公刊できたならば、という要望は、会員諸彦のいつわらざる声であつた。たまたま、時あたかも学会設立十周年を迎えるにあたり、記念事業の一環として、この切なる希求が採用されることになり、各年度の目録を基礎としつつこれに十全の修訂・増補を加え、一本に編んで活字に移されるはこびにいたつたのである。かくて、田中周友教授を編集代表として、この至難の作業は出発したのであるが、その後、さかのぼつて終戦時までの研究文献をも収めることに改められた。本書は、右のごとき意義と経過をもつて、編修が推進されたのである。